

五、加害者と被害者の違い

ところで、ヨセフはエジプトの司政者として、国民に穀物を販売する監督をしていた。ヨセフの兄たちは来て、地面にひれ伏し、ヨセフを拝した。ヨセフは一目で兄たちと気づいたが、そしらぬ振りをして厳しい口調で、「お前たちは、どこからやって来たのか」と問いかけた。

彼らは答えた。

「食糧を買うために、カナン地方からやって参りました。」

ヨセフは兄たちだと気づいていたが、兄たちはヨセフと気づかなかった。ヨセフは、そのとき、かつて兄たちについて見た夢を思い起した。

ヨセフは彼らに言った。

「お前たちは回し者だ。この国の手薄な所を探りに来たにちがいない。」(創世記四二章六節～九節)

.....

ヨセフは、こうして彼らを三日間、牢獄に監禁しておいた。」(創世記四二章一七節)

創世記は、三七章、三九章～五〇章のヨセフ物語で締め括られます。

ヤコブには、一二人の息子がいました。ヤコブは、母親の偏愛によって育てられたせいでしょうか、彼自身もたいへんな偏愛を示します。

イスラエル(ヤコブの別名)は、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。(創世記三七章三、四節)

ひどい父親もいたものです。これでは、他の兄弟が妬むのも仕方ありません。その上、ヨセフが一七歳の時、兄たちがみんな揃って自分にひれ伏す夢を見たと告げたので、ますますヨセフは憎まれることになります。(三七章五節～八節)そして遂に兄たちは、ヨセフを殺そうと相談し、枯れた井戸に放りこまれます。しかし、上の兄たち、ルベンとユダの提案で、エジプトに行く隊商に売り飛ばしてしまいました。父のヤコブには、野獣の殺されたと告げます。こうして、兄たちは、ヨセフと偏愛の父に報復しました。父のヤコブの悲しみは、尋常のものではなかったこと、当然です。(三七章一二節～三五節)

一方、エジプトへ売られたヨセフは数奇な運命をたどりつつ、夢を解く才能が認められて、ファラオ(エジプトの王の総称)に飢饉と豊作を予言し、その対策を提言して、ついに宮廷の責任者に任命されます。ヨセフ、三〇歳の時のことです。そして、予言したとおり、豊作の七年の後、七年の飢饉がやってきます。その飢饉は世界各地にも及び、世界各地から、ヨセフのもとに食糧を求めてやって来ました。(三九章一節～四一章五七節)

ヤコブの一族も例外ではありませんでした。そこで、ヨセフの兄、十人(末弟のベニヤミンは、

父のもとに残し) がエジプトに穀物を買いに出かけました。こうして、冒頭の聖書の言葉に到るのです。

ヨセフの態度は、硬く、意地悪にすら見えます。その「意地悪」が、エスカレートしてゆくのです。ヨセフは、兄たちを三日監禁した後に、末の弟（ヤコブがかわいがっているベニヤミン）を連れて来るように命じます。

彼らは同意して、互いに言った。

「ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうともしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった。」

すると、ルベンが答えた。

「あのときわたしは、『あの子に悪いことをするな』と言ったではないか。お前たちは耳を貸そうともしなかった。だから、あの子の血の報いを受けるのだ。」

彼らはヨセフが聞いているのを知らなかった。ヨセフと兄弟たちの間に通訳がいたからである。ヨセフは彼らから遠ざかって泣いた。それからまた戻って来て、話をしたうえでシメオン（ヤコブの次男）を選び出し、彼らの見ている前で縛り上げた。（四二章二〇節～二四節）

ヨセフは、兄のルベンの反省の言葉を聞いて、隠れて涙を流します。でも。その直後、シメオンを縛り上げて人質にします。でも、彼らが支払った銀は、そっと返しています。兄たちは、当然、動揺します。

みんなの者は驚き、互いに震えながら言った。

「これは一体どういうことだ。神が我々になさったことは。」（四二章二八節）

不可解なヨセフの仕打ちを彼らは、「神が我々になさったことは」と受け取るところに、この物語の救いがあるような気がします。普通ならば、「あのエジプトの司政者は、何を考えとるんじゃ？」で終わっているでしょう。でも、それを「神が我々になさること」と受け取ることが信仰だ、と思うのです。そうすれば、人を恨まずに済みますし、後になれば、必ずその出来事の意味が見えてくるのです。

ヤコブ一族は、人質となったシメオンのことが気になりながら、ヨセフを敬遠するようになるのです。父ヤコブが、ヨセフに連れて来いと命じられていたシメオンを連れ出すことに命懸けで反対しているからです。しかし、背に腹は代えられない事態に立ち至ります。飢饉が一層ひどくなって、どうしても穀物の買い出しにエジプトに行かなければならなくなります。父ヤコブはベニヤミンを連れて行くと約束したことで息子たちを再々非難しながら、結局、事態解決のために、息子たちの提案に賛成し、十分な贈り物を携えるようにアドバイスします。（四二章二九節～四三章一五節）

ヨセフが待っていた弟のベニヤミンが目の前に姿を見せました。いよいよ「涙の再会」となる

か、と思うと、そうは行きません。

ヨセフは同じ母から生まれた弟ベニヤミンをじっと見つめて、「前に話していた末の弟はこれか」と尋ね、「わたしの子よ。神の恵みがお前にあるように」と言うと、ヨセフは急いで席を外した。弟懐かしさに、胸が熱くなり、涙がこぼれそうになったからである。ヨセフは奥の部屋に入ると泣いた。やがて、顔を洗って出て来ると、ヨセフは平静を装い、「さあ、食事を出しなさい」と言いつけた。(四三章二九節～三一節)

ヨセフは、まだ素直になれなかったようです。ベニヤミンには、他の兄弟の五倍もの料理を出してもてなしながら、帰りには、部下に命じて、ベニヤミンの穀物の袋にヨセフの一番大事な銀の杯を隠させます。そんなことは露知らない兄弟たちはカナンへの帰途、追っ手にその杯をあばかれて、エジプトに引き返し、ヨセフの前に出ます。そうして、ユダが、弁明します。

「実は、この僕が父にこの子の安全を保障して、『もしも、この子をあなたのもとに連れて帰らないようなことがあれば、わたしが父に対して生涯その罪を負い続けます』と言ったのです。何とぞ、この子の代わりに、この僕を御主君の奴隷としてここに残し、この子はほかの兄弟たちと一緒に帰らせてください。この子を一緒に連れずに、どうしてわたしは父のもとへ帰ることができましょう。父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません。」(四四章三二節～三四節)

長兄のルベン、次男のシメオン、四男のユダと、兄弟たちは、すっかり年老いた父思いになっており、弟思いにもなっていました。そうしてついに感激の再会が訪れます。ヨセフは、我慢出来なくなって大声で泣いた上で、兄弟に自分の身を明かします。驚く兄弟たちに、ヨセフは、こう言うのです。

「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。……わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」(四五章四節～八節)

こうして、崩れていた兄弟関係が回復され、天下晴れて、父ヤコブをエジプトにむかえることが出来ました。めでたし、めでたし、というところですが、ちょっと待ってください。このヨセフ物語の聖書研究をある家庭集会でしていたところ、どうして、ヨセフは、こんなに手のこんだ仕返しというのか、意地悪をしたのだろうか、ということが問題になり、一緒に考えました。そうして、みんなでハッと気づいたことがありました。

「加害者は、すぐ忘れるが、被害者は、決して忘れられない」

ということでした。ずーっとヨセフ物語を読んでいると、穀物買い出しの頃から、いつの間にか、私たちは兄弟たちの側に立って読んでいることに気づきました。父親からの偏愛をそのまま受け取っていい気になっていたヨセフも問題かも知れませんが、兄たちに殺されようとしたヨセフの傷は、遥かに大きかった、と思います。そのため、ヨセフは、たいへんな苦勞を強いられます。神の助けがあったからこそ、その時のヨセフがあったのだ、と彼自身は痛感していました。しかし、加害者の兄たちに会ったときは、懐かしさも大きかったのですが、複雑な気持ちだったのでしょう。

朝鮮人民共和国からの一時帰国の日本人妻たちに対して、面会を拒絶する家族や親戚がある、ということニュースで聞くのですが、これだって、第三者が簡単に「せつかく帰って来たのに、会ってやればよいのに」なんて決め付けられない双方の大きな心の傷があることを想像しなければならぬことを教えられました。

太平洋戦争で、日本軍や政府が行なったことで、なお心の傷が癒されていない人々が無数にいることも私たちが決して忘れてはならないのだ、ということも合わせて考えさせられたことでした。

ヨセフの兄弟たちは、劇的な和解をいたします。それでも、父ヤコブが亡くなった後で、再び兄たちは、ヨセフの報復を心配しました。(五〇章一五節～一七節) その上で、彼らは、心から、「お願いします。どうかあなたの父の神に仕える僕たちの咎を赦してください。」(五〇章一七節)と謝罪しました。

これを聞いて、ヨセフは涙を流した。

……………

ヨセフは兄たちに言った。

「恐れることはありません。わたしが神に代わることができましようか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにして下さったのです。どうか恐れなくてください。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう。」

ヨセフはこのように、兄たちを慰め、優しく語りかけた。(五〇章一九節～二一節)

「済んだことは水に流そう」とか、「いつまでも過去のことにこだわっていないで、いい加減に前向きな考えよう」という論理は、加害者の論理で、被害者の心を見殺し、被害者をいつまでも押し込めたままで、その犠牲の上にあぐらをかいた冷たい社会となり、誰もが本気に信用しない国家となってしまうのではないのでしょうか？

しかし、創世記は、「悪を善に変える神」がテーマになっているような気がします。いい加減だったり、卑怯だったり、だましたり、せつぱつまった小さな知恵に動かされて勝手なことをしてしまう人間たちのありのままを描きながら、その背後に常に優しい目で見守る神を知らせてくれているので、私は大好きなのです。

初めに、神は天地を創造された。(創世記一章一節)

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。(ローマの信徒への手紙一章三六節)